

2月号に掲載した「在留邦人」加治屋百合子さんのお話の中編 (Part2) です。

前回のお話: 加治屋さんは、幼稚園の時に習い事の一つとしてバレエに出会い、10歳で上海国立バレエ学校へ入学しました。中国人に交じって寮生活をしながらバレエの練習をする中で、どんどんバレエにのめりこんでいきます。(佐藤暁子)

加治屋百合子さん ヒューストンバレエ プリンシパル (Part 2)

●カナダ、そしてニューヨークへ

一カナダ、ニューヨークへのいきさつは?

「ローザンヌ国際バレエコンクール」はNHKで毎年放送されていて、母が録画してくれていたの、日本に帰る度に楽しみに観ていました。そんな中、上海舞踊学校を卒業する2年程前より、同世代の日本人の子が出場しているのを見て私もこのコンクールに出場したいという夢を抱くようになりました。

15歳になり学校にコンクール出場の話をしたところ、このコンクールではひとつの学校からの参加人数は4名までと決められており、留学生の私にその枠を与えてしまうと中国人の生徒が3人しか出場することができなくなってしまうため、初めは無理だと断られてしまいました。そんな中、学校からの提案で学校内で選抜会を開き、上位4名に参加枠を与えることになりました。私はその権利を勝ち取ってコンクールに出場できることになりました。

コンクール出場について、他の3人は中国人で国立の学校からの参加であるため、経費全額を国が負担し、国を背負っての出場でした。賞を持ち帰ること以外は考えられないような環境でした。結果、私を含め3名が受賞しました。終了後のインタビューでは「私は、賞を取るために来ました」と迷いなく伝えていました。あの時は、私も学校を代表して出場していると子供ながらに思っており、それ以外の発言は考えられなかったのです。今考えると、他に受賞した日本人の方は「賞が取れるとは思いませんでした。嬉しいです」と謙虚に語っていたので、私の発言にインタビュアーの方はとても驚かされていたと思います(笑)。

一コンクールの後はどうされたのですか?

ローザンヌでは、審査方法が毎年改訂されていますが、私が出場した年は、今のような順位を伝える形式ではありませんでした。私は、奨学金を得て留学をすることができる「ローザンヌ賞」を受賞し、名だたるバレエ学校のリストを頂きました。

中国では諸外国のバレエ情報は少なく、どこがいいか迷っていたので、ローザンヌの事務局の方と相談し、上海のバレエ環境とは違う全寮制のカナダナショナルバレエスクールを推薦していただき、留学先に決めました。

一カナダの学校はいかがでしたか?

生徒にストレスを与えないことが方針でした。上海では毎週体重を測り、少しでも太ると先生に注意を受けていましたので、まず学校に体重計が配置されていないことに驚きました。また、中国では練習漬けの毎日が当たり前でしたが、週末にはスタジオが閉鎖されてしまうため、バレエの練習をしたいのに自由にできないことが焦りとなり、逆に大きなストレスになっていました(苦笑)。

入学時は技術レベルではなく、年齢に見合ったクラスに編入したことに悩み、英語もろくに話せなかったのですが、電子辞書を持って校長先生のところに行き、バレエをもっと学びたい、上のクラスに編入したいと自分の気持ちを一生懸命伝えました。今考えると度胸があるなあと思いますが、長年中国でのスパルタ教育を受けていた当時の私は、何が普通かの判断がなく、厳しい練習を求め必死だったのです(笑)。その後、先生方が私の技術レベルを確認し、認めていただき、一番上の学年のクラスで学べるようになりました。レッスンも増えて、満足したのでストレスはなくなりました(笑)学校は全寮制でしたが、サインイン・サインアウトはあっても、門があるわけではなく、門限の時間内には自由に郊外に出ることができました。近隣にあるアイスクリームショップでアイスを買ったり、友達と食事に出かけたりと、今まで体験したことのない寮での生活を楽しんでいました。

お陰で私がこれまでの人生の中で一番ぼっちゃりと太り、身長が伸びた時期でもありました。

一ローザンヌの事務局の判断は正しかったというわけですね。

正しかったかどうかは分かりませんが、トロントにいたことがAmerican Ballet Theatre (ABT)に入団するきっかけに繋がったのは確かです。でも、当初はヨーロッパに行きたい思いもなかったので、人生何があるかわかりませんでしたね。

寮のルームメイトがとても積極的に話をしてくれたので、英語が自然と上達していきました。

ABTのオーディションのきっかけは、卒業生がバレエ団のオーディションを受けに行くのを知り、良い機会だと思い同行したことです。ニューヨークへオーディションを受けに行った時は、あらゆる人種の人がいっぱいいてニューヨークには少し怖いイメージを持ちました。しかし、実際にニューヨークに住んでみたら活気にあふれ、たくさんの刺激を受けることができる大好きなシティになりました。

2001年にジュニアカンパニーに入団した1週間後に9・11がおきました。あの日、スタジオに行く途中で地下鉄を降りると、多くの人が同じ方向を見ている異様な雰囲気でした。何事かその方向を見ると、ツインタワーのひとつから煙が上がっていて…衝撃的でした。その時はテロだと分かっていなかったもので火事だと思いました。スタジオに行ったら、ダンサー達はその話をしているのですが、早口のアメリカ人の英語についていけず詳細を把握することができませんでした。その後、バレエ団の監督より、「今日はもうみんな安全な場所に帰っていい、ツインタワーに飛行機が衝突してテロが起きている」と伝えられました。地下鉄もバスも全てが止まってしまい、バレエ団から住んでいたアパートまで60ブロックくらい歩いて帰りました。

私は当時、携帯電話を持っておらず、家族と連絡が取れたのは1日半後でした。母はテレビで惨事を知り、連絡が取れないので地図でツインタワーからスタジオやアパートへの距離を調べていたそうです。私の安否が分からず、確認が取れるまではいたたまれない気持ちだったと聞きました。

テロから1週間ほどは、町のすべてがシャットダウンされていた状態が続きました。

一それ以来ずっとマンハッタンに住んでいらしたのですか?

ジュニアカンパニーは最長2年在籍できますが、メインカンパニーに入団できる保証はなく、入団できなかったダンサーは、他のバレエ団へオーディションを受け、移らなければなりません。私は、ジュニアカンパニーに入り3ヶ月後にABTより入団のお話をいただいたのでとても嬉しかったです。マンハッタンには13年住んでいました。

一百合子さんはトップのトップということですね。

いいえ、まだまだです。入団するにはもちろん才能と技術が必要となりますが、その時にどういうダンサーを求めているか、タイミングも重要となるのが大きいです。ちなみに、私が入団して12年くらい日本人は私ひとりしかおらずませんでした。

一ABTにいた時に、一番印象に残っている作品は何ですか?

いろいろ作品があるので一つに絞るのは難しいですね…。

ABTでは、2~3年に1度「日本公演」がありました。在籍中はカンパニーメンバーとして4回日本ツアーに加わり、初めは立っているだけの役でしたが、来日の度に階級が上がる姿を日本の皆様、そして家族に観ていただけたことがとても嬉しく、自らの成長に繋がるものとなってしまいました。(Part3に続く)



▲ABT日本公演記者会見



▲ローザンヌ国際バレエコンクール 審査員として



▲ABTメトロポリタン劇場にて恩師イリーナとリハーサル